

伝書鳩

第
18
号

井上靖記念文化財団

月の出

井上 靖

柳田國男は高名な随筆「山の生活」で神かくしのことに触れている。この世には、いけない刻ときというものがあって、その中に身を置くと、人は往々にして先祖返りをする。原始時代の心が立ち戻って来て、山に向って歩き出す。これが神かくしに他ならないと記している。今日の人間蒸発という奇怪な現象も同じようなことかも知れない。この柳田的解釈によると、われわれもいつ原始からちよっかいをかけられぬものでもない。出離遁世は強あながち他人の問題ではなくなる。が、何と言っても、うんざりするのはいけない刻という特殊な空間と時間の座標だ。

数年前のことだが、私はナポリの海沿いのしゃれたレストランのテラスで、恐らくそいつに、そのいけない刻という奴に出遇ったのだ。潮の中には無数のくらげが浮遊しており、港ではスエーデンの客船が出帆のドラを鳴らしていた。私は卓上のバラの花をむしゃむしゃ頬張りたい欲求に耐えながら、遅い月の出を待っていた。と言っても、私が本当に待っていたのは月の出などではなく、他のものであった。ただそれが何であるか、どうしても思い出せなかった。どこかでボーイが銀盆を落した。私はふいに立ち上がった。取引はその時不調に終わったのだ。私は文明から原始に引き渡され、また原始から文明へ突き返されたのである。明るい月が上がり、海は暗くなっていた。



月の出(詩) 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

再興した井上靖文化賞 その経緯と役割 篠弘……………8

鳩のおしらせ①……………15

第一回 井上靖記念文化賞 小田豊氏・菅野昭正氏に……………16

井上靖の原郷 伏流する民俗世界⑤ 野本寛一……………24

丸山薫と山形 義父・靖、そして恩師との不思議な縁 井上弓子……………42

鳩のおしらせ②……………47

平成二十八年度 事業報告 井上修一……………48

図書だより……………58

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

本財団の運営を旭川市との共同作業にする計画は、平成二十八年の六月二十日に旭川市の西川将人市長と本財団理事長との間で「井上靖記念事業の実施に関する協定」が結ばれ、めでたく正式に動き出すことになりました。それに当たって旭川市の社会教育委員会は「井上靖記念事業実行委員会」を立ち上げ、財団の実務に関する主要部分を引き受けてくださることになりました。財団の事業の中核であった「井上靖文化賞」も、中断したままで皆様にご心配をお掛けしておりましたが、本年度より「井上靖記念文化賞」と装いを改めて再出発をすることができました。

「井上靖記念文化賞」の候補推薦をお願いいたしました北海道新聞社をはじめとする地方新聞社の方々、また選考委員をお引受けくださいました諸先生方のご尽力で、二十九年三月四日には第一回受賞者に小田豊、菅野昭正の両氏が決定し、五月二十日には旭川グランドホテルで贈呈式が行われました。二十九年は父の生誕百十年の年でもあり、これに勝る喜びはございません。

旭川市との連携はお互いにまだ不慣れの点多く、理事・評議員の皆様からのご意見をいただきました。今後とも皆様のご指導を受けながら、賞と財団を旭川市のご協力を得て発展させていきたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

平成二十九年十月吉日

再興した井上靖文化賞

その経緯と役割

篠 弘（歌人・井上靖記念文化賞選考委員長）

当財団が旭川市の協力を得て、井上靖文化賞が再興されたことは慶賀に堪えません。去る五月二〇日に旭川市の贈呈式において、六花亭製菓株式会社前社長の小田豊氏と、世田谷文学館館長の菅野昭正氏とお二人に、ぶじに受賞していただいたことはご存じの通りです。（以下、敬称を略します）

当財団として、文化賞顕彰事業は、事業の大きな柱であります。理事長の再開を希う意向を受けて、理事・評議員からも熟慮してきましたが、なかなか具体案を得るに至りませんでした。第一次の本賞のイメージが大きかっただけに、とかく小振りなものになりかねなかったのです。ようやく起案できたのは、生まれ故郷である旭川市の井上靖記念館が、東京都世田谷区

井上靖邸の書斎・応接間を移築し、二〇一二年五月から公開するという、じつに積極的な文学館活動が、その引き金になったと思われます。その性格は後述しますが、旭川市が基点となって再出発することによって、すくなからぬ変化が生じてくることが予測されました。もとより再興されるうえで、何らかの新しい視点が構築されるのは当然のことであり、私もその構想のなりゆきと進捗を、遠くから見守っている評議員の一人でありました。

ここで本賞を理解されるために、第一次の「井上靖文化賞」を簡潔に紹介しておきます。歿後一年を経た一九九二年三月に設立された当財団が、小学館・集英社が出資する一ツ橋総合財団の協力を得て、九三年か

ら開始されました。表彰の対象は「文学、美術、歴史などの分野における創造的な芸術活動や、卓抜した学術の成果ならびに多年にわたる実践や地道な研究で、今後の一層の活躍が期待される人、及び団体」で、当初の選考委員は、大江健三郎、大岡信、司馬遼太郎、樋口隆康、平山郁夫といったメンバーでした。

- 第一回（一九九三）小澤征爾
- 第二回（一九九四）ドナルド・キーン
- 第三回（一九九五）陳舜臣
- 第四回（一九九六）白土吾夫と日本中国文化交流協会
- 第五回（一九九七）梅原猛
- 第六回（一九九八）加山又造
- 第七回（一九九九）大野晋
- 第八回（二〇〇〇）白川静
- 第九回（二〇〇一）安田侃
- 第一〇回（二〇〇二）本間一夫と日本点字図書館
- 第一一回（二〇〇三）直木孝次郎
- 第一二回（二〇〇四）中村稔

- 第一三回（二〇〇五）受賞者辞退
- 第一四回（二〇〇六）志村ふくみ
- 第一五回（二〇〇七）嶋田しづ

一ツ橋総合財団の理事長相賀徹夫は、小学館の社長
の時代から井上靖を尊敬し、三十余年の親交のあった
人です。この賞の運営に関して陣頭指揮をとられまし
たが、この第一五回に至った段階で、十分にその役割
を果たしたという認識を明言されたのです。

この賞の起案とその運営の裏方に携わってきた者の
一人として、私も大きな衝撃をうけましたが、終束は
納得のいくものでした。単なる文学賞にとどまらずに、
文化功労者になるような文化人を推挙できたこと、そ
のうえ井上靖とゆかりの深い多力者がきわだったこと
が、その成果として挙げられましよう。山の上ホテル
における贈賞式の答辞で、受賞者から井上靖との計ら
ざる出合いのエピソードを拝聴するのが愉しみでした。
その一方で、その年度の活躍や事業に拘泥しないと
いう選出が、いかに難儀なことであるかも知りました。

おのずから知名度の高い人に集中するうらみもありました。また、選考委員が超多忙の人ばかりで、直接的な論議が不十分であり、それを補う対策が欠けていたことも足を引っ張りました。受賞者を選び泥んだ後半に及び、とかく特定の専門領域に広がって、その魅力が、表彰にふさわしい普遍性をもち難かったことも、顧慮すべきことであつたと考えられます。

当財団の井上修一理事長が、こうした経緯を知る私をご存じであつたからでしょうか、昨秋の一〇月一三日に電話で、第二次の新しい賞の選考委員の依頼を受けました。さらに数日後に、文学関係に適切な委員の推挙を求められ、ご助力することとなりました。同理事長からは、第一次の第一〇回の受賞者「本間一夫と日本点字図書館」のような、全国的に隠れた地道な文化活動に力点を置きたいとの意向をうかがうものでした。そこに新たな第二次の突破口があるうかと、ただちに賛同したからにほかなりません。さらに日本文藝家協会の理事長をした者として、その委員長を仰せ

によって、共同通信社をはじめとする全国の地方新聞の各社に、推薦の依頼を発注されていたのでした。制度要綱の「選考方法」に規定された通り、当初から「受賞者は、報道機関等の推薦があつたものの中から決定する」という、従来にない異色のものでした。

公表された「募集要領」の「対象」は、次のような内容です。「文学、美術、音楽及び歴史等の文化活動において優れた作品や活動を有し、また、その活動を通じて継続的に地域や社会に著しく貢献していることが認められる個人又は団体」であつて、この前段は第一次のそれに相通ずるものであり、何ら問題はありません。その後段も、新たに地方性を重視した特徴にほかなりませんが、地域の枠を超えて、全国的に影響や暗示を与え得るものが見出されるかどうかが難題で、選考の争点になるものと思われました。

そして、本年三月四日の東京ドームホテルの選考会が近づいた段階で、二月一〇日の午後篠の自宅に、旭川市の教育委員会の責任者であり当実行委員長の小岡昌弘をお迎えしました。事務局の二人が同行されま

つかります。

かくして、昨年十一月一日付で決まつた第二次の選考委員は、次の五人でした。任期三年で、五十音順に記します。全く新しいメンバーとなりました。

木村仁（五八歳／北海道新聞社編集局文化部長）

酒井忠康（七五歳／美術評論家、世田谷美術館館長）

篠弘（八三歳／歌人・評論家、日本現代詩歌文学館館長）

辻原登（七〇歳／作家、神奈川近代文学館館長）

藤澤全（七九歳／日本大学元教授、井上靖評伝研究者）

この五人で討議し、第二次の本賞の対象や性格を明らかにし得るのではないかと、まずもって安堵したのですが、実際はそれからが大変でした。

じつはこの選考委員が決まる以前の段階で、つまり昨年の八月九日付で「井上靖記念文化賞制度要綱」が既定されていたのでした。それにもとづいて「募集要領」が作成され、「対象」「賞の種類」「推薦方法」などが明記されて、すでに井上靖記念事業実行委員の名

した。

地方新聞社からの推薦がやや少ないということから、今後は日本ペンクラブ、文藝家協会や、有力な文学館の協力を求めること、百万円の賞金の「大賞」と、三〇万円の「特別賞」の賞金に差があり過ぎて、両賞が併立し難いこと、本賞が全国版の新聞に発表されたいことなどで、約二時間の面談となりましたが、概ね実行委員長の賛同を得る機会となつたのです。

地方新聞社に推薦を発注するに際しても、応答くださる部署が、学芸部・文化部なのか、事業部なのか、あるいは諸企画に携わる所なのか、社によって異なります。北海道新聞社の関係者の多大な労力にあづかったわけですが、第一回なのでやむを得ません。これからは、本賞を理解くださる最適な部署への呼び掛けと、できたら催促もされることを念じます。「受賞者は、報道機関等の推薦があつたものの中から決定する」という、この要綱の規定を広義に解釈するにしても、地方新聞社からの貴重な情報は欠かせないものとなりましょう。

ここで、はじめて三月四日の選考委員会の概要に触れてまいります。事務局から内示された日程表に対して、委員長としての注文は、開始時間を早めて、討議時間を増やすことから始まりました。本賞の性格をめぐって共通認識をもつうえで、余裕が欲しかったからです。午後一時半からの開会となりました。

選考委員の五人は、紛れもなく揃いました。委嘱状交付、主催者挨拶、出席者紹介などは、割愛します。篠委員長が承認され、辻原副委員長が互選され、合わせて四時間に及ぶ審議に入ったのです。

そこで浮上したのが、世田谷文学館館長の菅野昭正です。推薦理由としては、菅野のプロデュースする連続講座とその出版の成果が挙げられていましたが、同館の多彩な企画展は、委員らが熟知するものでした。文学を愉しく理解するため、他ジャンルとのクロスオーバーや、アイデアにとんだ展示方法など、文学館活動の中でも傑出しています。また、フランスの詩人マラルメ研究の第一人者であり、現代フランス文学の翻訳者としての活躍ぶりも話題となり、全員が候補と

することに賛成されたのです。私は同氏が、第一次の本賞の後半から、選考委員として助力してくださったことを思い出しておりました。

この内定につづいて、六花亭製菓の小田豊が話題となり、同社の食文化研究所の幅広い文化活動の展開が注目されます。私はかつて帯広市に講演に赴いた際、当地の名菓として味わい、その名を記憶したに過ぎませんでした。同社が業績からの収益を文化活動に寄与されていることを知りました。推薦理由として列記された文芸に関する事業の夥しさに驚きました。

一九六〇年からの児童詩誌「サイロ」の発行、創業五〇周年を記念したコンサートや寄席の開催、中礼内村に坂本直行記念館、相原求一朗美術館、小泉淳作美術館の開設、食文化に関する蔵書を閲覧できる「六花文庫」を運営するなど、比類のない広範囲のものでした。委員の誰からともなく、これも候補にしたい旨の声が挙がったことは言うまでもありません。

この二件の候補が出揃ったところで、委員長から事務局に対して、二人に大賞を出すことに問題はないか

と問い質したところ、運営面でも予算面でも支障をきたさないとの即答があり、菅野昭正と小田豊とへの二人の授賞が決定をみるに至った次第です。

大賞が二件となったこともあって、募集要領に発表されていた「特別賞」については、とりわけて審議すべきテーマもないことから、今回は今後の課題として見送ることになりました。

こうした選考の過程で見えてきた志向は、新たに地方性を重視していくうえで、当該地域において意義深いものであっても、全国的な視点から判断したいということでした。その業績と知名度もさることながら、地域の枠を超えて全国的に影響をもつ活動であるかが問われ、また、その活動が地域社会に還元されていくものであるかどうか、大きな決め手になるといふことでした。

それから井上靖との関わりですが、没後二六年という四半世紀を越える時代に入りました。もはや直接的な交わりや影響関係は望むべくもありません。間接的なものが現出してくることは考えられますが、とりわ

けネーミングに拘泥しないことのほうが、授賞の領域が広がりました。選考会の終りに私が発言したことです。本賞の第一次を「井上靖文化賞」と呼称し、この第二次からは「井上靖記念文化賞」と命名して、「記念」を強調していきたいものと存じます。

五月二〇日の旭川グランドホテルにおける贈呈式については、当財団の井上理事長をはじめ理事・評議員ら、約二十名が首都圏から参加されておりますので、ここでは省略します。配布された冊子に、すでに簡潔に「選考経過」「選考理由」が記載されています（本誌に転載）。式上、選考委員長として三分のスピーチをしましたが、この一文の要旨を述べたつもりです。

なお、六月一七日付で理事長から、第一回の授賞に際しての運営上の問題点が、かなり解消されたことを知りました。二回目からは賞状の差出人が、当財団の理事長井上修一、実行委員長赤岡昌弘の順で併記されるようになったこと、賞状等の贈呈者の役割や、セレモニーにおける挨拶の順などが適切になったことも良

かったと存じます。しかし、「文化賞の推薦方法について」は、私は納得できません。「次回から、これまでの報道機関からの推薦に加えて、全国の文学館協議会などの文化団体や、当財団（理事会、評議員会）からの推薦をいただく方向で、実行委員会で検討しておりますので、もう少しお時間をください」とありましたが、にわかに賛成できません。まず今後、地方新聞社からの推薦も増えてきましょう。全国文学館協議会に加盟する文学館は約百館に及びます。また、美術館連盟協議会に加わる美術館も、同じくかなり多いと思われまます。私立の個人文学館や美術館のそれよりも、県立や市立、あるいは区立の活発な活動をしている所に、あらたに推薦をお願いすることになりましょう。四、五十を超える推薦者が出てくれば、選考委員会は容易に対応できませんが、地方新聞社と同様に集団・組織から出てきた推薦は尊重し、然るべき適切な順応万策を講じてまいります。

また、井上理事長や実行委員会の裁定による選考委員会は、ひとえに当財団から受賞者の選出を委嘱され

たものであり、理事会・評議員会は、その結果を期待して見守ってくださいのお立場でありましょう。このたびの案件は、理事・評議員それぞれが個人推薦者を出したいという要望です。選考委員会の機能や裁量を束縛するものにほかなりません。理事・評議員からの提案を優先できませんし、採択されなかった場合も、特にその理由を述べられませんので、不信感や軋轢を生じかねません。二重構造になりかねない煩瑣な方策は取らずに、本賞の対象や性格が具現化されるであろう、その第三回目あたりまで、寛容なる立場からの支援をお願いしたいものです。

今後も第一期の三年間を、選考委員の一人として鋭意とめてまいります。御陰様で第一回の贈賞が好評であったことを抛り所として、井上靖記念文化賞の存在感が定着することを祈念してやみません。さらに本賞の文化界に果たす役割を熟慮してまいりますので、選考委員に課せられた役割は大きいものがあります。関係者の皆さまに対し、寛容なるお立場からのご支援を仰ぎたいものです。よろしくご諒解ください。

◎井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「色紙にみる井上靖の世界」展
井上靖は自作の詩や小説、エッセイの一部を好んで色紙に著しました。今回の展示では「色紙から見る井上靖の世界」と題し、色紙とその出典となる作品、および井上靖ゆかりの人物の色紙をとおして井上靖の多様な世界を紹介します。

【書齋・応接間の書籍紹介】
東京都世田谷から移転した井上靖邸の書齋・応接間の書籍をラウンジに展示して紹介します。間近に作家の愛蔵書を見ていただくことができます。今回は『若冲』（美術書）を展示します。

問い合わせ・井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六一五一―一一八八

◎あすなる忌

毎年、井上靖の命日（二月二十九日）に近い日曜日を
選び、墓参をはじめ、生地・湯ヶ島で井上靖を偲ぶ催しを行っています。

とき・平成三十年一月二十八日（日）

十時 墓参（熊野山墓地にて。九時三十分在天城会館に

集合）

（以下、天城会館にて開催）

十一時 井上靖作品読書感想文・感想画コンクール表

彰式

十二時 昼食（おぬい婆さんのカレーライス）

十三時 佐藤純子氏（日中文化交流協会理事）による講演

主催・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会

共催・井上靖文学館・井上靖記念文化財団

問い合わせ・伊豆市教育委員会社会教育課

☎〇五五八―八三―五四七六

第一回 井上靖記念文化賞

小田豊氏・菅野昭正氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成一九年の第一五回表彰を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、また、その活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人又は団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しまし

た。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

選考経過

第一回井上靖記念文化賞の選考委員会は、委員全員が出席し、三月四日に東京ドームホテルにおいて開催されました。

選考委員には、幅広い分野に及ぶ文化活動を審査す

るため、各分野の見識を有する五名の委員が就任し、三年間にわたって担当されます。当日は事前に全国の報道機関等から推薦された合計一四件の個人・団体について、それぞれ一件ずつを吟味し、意見を交わし議論を繰り返しました。

本賞は、優れた文化活動を通じた社会貢献・地域貢献を行っている個人・団体を対象としていますが、議論の中では当該地域において意義深い活動をしているものの、全国的な視点に立った際に類似した取組を見ない特筆すべきものかという点から、厳しい意見も交わされたところです。今回受賞が決まった小田豊氏と菅野昭正氏については、その業績と知名度において地域の枠を越えて全国的に影響を持つ活動をしており、また取り組んでいる文化活動が地域や社会に還元している点が高く評価されました。

また、募集要領を発表した際は、大賞一件と特別賞という二種類の賞を予定していましたが、小田豊氏と菅野昭正氏の二者が大賞候補に絞られた段階で、両者に甲乙はつけ難いという意見が出ました。更に議論を

重ね、両者は活動の場を異にしながらも他に比類のない活動を行っていることから、委員の全会一致で、両者を共に「第一回井上靖記念文化賞」の受賞者に決定しました。

なお、特別賞については、十分な時間をかけて討論されましたが、該当なしとの決定をみました。

井上靖記念文化賞選考委員会

井上靖記念文化賞選考委員会委員

選考委員長

篠 弘 (歌人・日本現代詩歌文学館館長)

選考委員

木村 仁 (北海道新聞社編集局文化部長)

酒井忠康 (美術評論家・世田谷美術館館長)

辻原 登 (作家・県立神奈川近代文学館館長)

藤澤 全 (元日本大学教授・国際関係博士)

(敬称略、五十音順)

小田 豊（おだ・ゆたか）

六花亭製菓株式会社元代表取締役社長、六花亭食文化研究所所長

選考理由「食文化と芸術全般にわたる振興と寄与に對して」

昭和四十七年父の創業した製菓会社に入社。平成七年からは代表取締役社長に就任し、先代を引き継いで会社を運営してきた。六花亭のブランドは、北海道を代



表する製菓会社として全国に知られている。

その品質を維持するため、製造は十勝地区、販売も北海道内に特化し、造り手である社員に對しては100%の有給休暇取得の実現や、「一人一日一情報」という取組で、社員からの意見・提案を社内日刊新聞として昭和六二年から毎日発行するなど、独特の経営哲学を実践して、会社を牽引してきた。

製菓事業と併せて、先代の時代から取り組んでいる文化活動を更に充実させ、食文化に貢献する個人・団体に對する「小田豊四郎賞」の顕彰を平成一六年から毎年続けているほか、美術館が点在する「中札内美術村」、七つの作品館と山野草の咲く「六花の森」、音楽ホール「ふきのとうホール」（札幌市）の建設・運営や、五〇年以上続けている月刊児童詩誌「サイロ」の発行など、様々な文化活動を行っており、その取組は民間事業者として比類のない充実した内容で、地域文化を発展させてきた。その活動は、北海道を訪れる観光客等を通じて、全国にも発信されている。

長年にわたり、地域に根ざした食文化の発展に寄与

するとともに、芸術全般の振興に力を尽くしてきた功績は極めて大きい。

経歴

- 一九四七年 北海道帯広市生まれ
- 一九七二年 六花亭製菓株式会社（当時・帯広千秋庵）に副社長として入社
- 一九九五年 代表取締役社長就任
- 二〇一六年 代表取締役社長を退任し、六花亭食文化研究所所長に就任

六花亭の主な文化活動

- 一九六〇年 児童詩誌「サイロ」発刊。現在に至る。
- 一九八二年 デセールコンサート・六花亭寄席を開始。
- 一九九二年 「中札内美術村（坂本直行記念館）」オープン。相原求一朗美術館、小泉淳作美術館などの他、レストラン棟併設（北海道中札内村）。
- 二〇〇三年 特定非営利活動法人「小田豊四郎記念基金」を設立。食文化に貢献する個人団体を顕彰す

る「小田豊四郎賞」を活動の柱にしている他、児童詩誌「サイロ」の発行、食に関する蔵書を閲覧できる「六花文庫」を運営している。

- 二〇〇七年 花柄包装紙に描かれた草花であふれる「六花の森」オープン（中札内村）。「花柄包装紙館」「サイロ五〇周年記念館」など、七つの作品館が点在。毎年、山野草の移植など環境整備を続けていく。

- 二〇一五年 六花亭札幌本店に音楽ホール「ふきのとうホール」「きたこぶしホール」を開設
- その他、食文化と芸術全般にわたる様々な取組を実施している。

受賞歴

- 二〇一〇年 六花亭製菓グループとして「ワーク・ライフ・バランス大賞」を受賞
- 二〇一一年 昭和三五年から五〇年以上の発行を続けている児童詩誌「サイロ」事業で、六花亭製菓株式会社「メセナワード2011・文化庁長官

賞」を受賞

二〇一一年 日本建築学会賞「建築業績」部門で、建築学会賞を受賞

二〇一五年 「渋沢栄一賞」を受賞（小田豊個人として）
受賞のことは

毎月一度、北海道新聞朝刊（第二土曜日）に「亭主の思い」と題して、拙文を掲載しています。その中から、バックナンバーをひとつ紹介したいと思います。当日の挨拶と重ならないよう相成りました。ご容赦ください。

『嘉會』

ひとりっきりの社長室が苦手で、大部屋でワイワイガヤガヤ仕事をしています。

その一隅に、お世話になった方々の顔写真が一四枚かけられています。心の健康管理を永年にわたりご指導くださった方。ホワイトチョコレートの製法を教えてくださいくださった方。六花亭と命名、揮毫してくださった

元東大寺管長・清水公照老師など、忘れられない方ばかりです。

人生は出逢いと言われますが、先代の父・小田豊四郎は『嘉會』と書き残しています。私どもの顔である花柄包装紙を描いてくださった坂本直行さんは今年、生誕一〇〇年を迎えます。また父が一〇〇年と、二人の節目の年です。

五七年前、児童詩誌『サイロ』の表紙絵をお願いに、父が十勝管内・広尾町豊似^{とよに}まで出向いたのが二人の始まりでした。「晩秋の青空にとけこんだラッコ岳からひと筋の雪が美しく見える日だった」と記されています。

もし直行さんとの出逢いがなかったら、今とはまったく違う展開になっていたことでしょう。二人の往時をしので、帯広・札幌両本店でたたいま回顧展を開催中です。

三月は進入学に加えて転勤シーズン。どんな出逢いが待っているのでしょうか。ドラマ『嘉會』の始まりです。
(平成二八年三月一二日掲載分)

菅野昭正（かんの・あきまさ）

世田谷文学館館長、文芸評論家、フランス文学者、
東京大学名誉教授

選考理由「長年にわたる文学的業績と世田谷文学館における企画運営に対して」

昭和五年神奈川県出身。東京大学文学部教授、白百合女子大学教授などを経て、平成一九年第二代世田谷



文学館館長に就任。平成一五年芸術院会員。東京大学名誉教授。

現代フランス文学の翻訳が多数あるほか、近現代日本文学の研究も盛んに行う。芸術選奨文部大臣賞、読売文学賞など、数多くの文学賞を受賞。ステファヌ・マラルメの研究はフランス本国でも認められている。

世田谷文学館館長就任後は、展示の魅力を高め、一般の人にも届きやすく発信し、文学の裾野を広げている。

平成二二年度から館長自らの企画、構成による連続講座を実施。日本文学と文化に大きな業績を残し、影響を与える作家を毎年一人取り上げて、作家にゆかりの深い複数の研究者等によって多角的に読み解き、考える場を設け、一般の読者が作家への理解をより一層深めるための貴重な手がかりを提供している。

加藤周一、村上春樹、井上ひさしをはじめ、平成二八・二九年度は瀧澤龍彦を取り上げ、現在も企画を続けている。併せて、講演録を基に同じタイトルの書籍を刊行。各講演者の選定・依頼、広報物の企画や、書

籍化のための出版社交渉、書籍化の際の総論執筆まで、一連の内容を館長自身が手掛けている。

長年にわたり、文学において卓越した業績を残すとともに、世田谷文学館の企画運営等を通じて文化の裾野を広げてきた功績は極めて大きい。

経歴

- 一九三〇年 神奈川県生まれ
- 一九八二年 東京大学文学部教授
- 一九九〇年 白百合女子大学教授
- 二〇〇三年 日本芸術院会員
- 二〇〇七年 世田谷文学館館長に就任

世田谷文学館における連続講座

- 二〇一〇年から館長自身の全面的なプロデュースで、連続講座を開催。その講演録を基に書籍も刊行されている。
- 二〇一〇年度 知の巨匠 加藤周一ウィーク
- 二〇一一年度 村上春樹の読みかた

受賞のことは

この度は「井上靖記念文化賞」受賞者にお選びいただき、過分の光栄と存じております。井上靖先生の質量とも豊富な文学作品は、同時代の読者として読みつづけ、その都度ふかく興味を覚えるとともに、啓発されること多大なものであります。また井上先生が日本ペンクラブの会長など、文化の振興に関わる数多くの要職に業績を重ねられたことに深甚な敬意を感じつづけてもりました。そのお名前を戴く賞を授与されるのは、まことに望外の喜びと申すほかありません。

平成一九九年、「井上靖文化賞」がいったん幕を降ろすまで、私は選考委員の末席につらなっております。その間、この賞がひろくわが国の文化全般を視野に収めるとともに、現代にふさわしく国際性を重んじる方針を堅持しつづけていることに、大きな意義を感じていました。今回、新たに設けられた本賞がその流れを汲みつつ、将来にわたって充実発展してゆくものと確信しておりますが、私のささやかな仕事、その最初

- 二〇一二年度 ことばの魔術師 井上ひさし
- 二〇一三年度 書物の達人 丸谷才一
- 二〇一四年度 辻井喬Ⅱ堤清二 文化を創造する文学者

- 二〇一五年度 大岡信の詩と真実
- 二〇一六・一七年度 夢と綺想の球体 澁澤龍彦

受賞歴

- 一九八四年 『詩学創造』で芸術選奨文部大臣賞受賞
- 一九八六年 『ステファヌ・マラルメ』で読売文学賞受賞
- 一九九七年 『永井荷風巡歴』でやまなし文学賞受賞
- 一九九七年 紫綬褒章受章
- 二〇〇一年 日本芸術院賞受賞
- 二〇〇六年 旭日中綬章受章
- 二〇一一年 『慈しみの女神たち』で日本翻訳出版文化賞受賞

の受賞にふさわしいか、不安を覚えないでもありません。しかし選考委員の方々、及び井上靖記念事業実行委員会の関係の方々、今後の努力しだいで合格の域に達するかもしれないと、ご配慮くださったものと推察しております。井上靖先生のご業績を長く顕彰する意味をもつ文化賞が再興されたことを慶賀しつつ、第一回の受賞の榮に浴させていただいたことに、重ねて衷心より感謝申しあげます。

*第一回井上靖記念文化賞贈呈式パンフレットより転載

野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

籠りの力

繭籠り

原郷、それは胎内、羊水の中にある己の状況に対する原感覚、既視感のごときものまで溯源し、たどることもできるはずだ。——井上靖の『幼き日のこと』にはそれが描かれている。鋭い感性や幼時からの記憶の反芻によってある種の持続が可能となる。

幼時、多少の物心がついて、自分が母親の腹部に仕舞われていたことを知るようになった頃、私は自分が母親の腹部の中にはいつていた状態を、

何となく蛹が繭の中にはいつているような、そのような状態として受け取っていた。郷里の山村では、どこかの家に行っても蚕棚があり、私たちは幼い頃から繭や蛹には馴れっこであった。自分は繭の中で身を縮め、息をこらして、外へ出して貰う時の来るのを、おとなしく待っていたのだ、そんな風に解釈していたのである。

閉じ籠められている世界はほの明るい平安なものであった。繭の白い表面のほんのりとした光沢、それを手にした時のやわらかい手触り、そうしたことから、そこがほの明るい微光が一面に立ち込めている、少しぐらいどこかにおつかろうと痛くはない世界に思われたのである。

胎内世界の平安、時満ちて生まれ出るまでの籠りの場がまことに美しく描かれている。繭に籠る蛹が羽化し、卵を生む。卵は孵って幼虫となり桑を食み、三眠し、脱皮してやがてまた繭に籠る。『万葉集』の中には「繭隠り」という古語が登場する。先人たちは、美しい糸を吐くこの虫に強く心を寄せてきたのである。強い力を発揮するためには、一定期間密閉空間に籠っ

て忌みの時間を過ごさなければならぬという民俗思想が、この国にはあった。

折口信夫は、秦ノ河勝の壺・桃太郎の桃・瓜子姫子の瓜・カグヤ姫の竹の節などを伝承上の籠りの空間としてあげている（『折口信夫全集

第二巻・古代研究（民俗学篇1）』中央公論社・一九五五年）。力を失ったり、生命力を衰退させた者が、忌み籠りによって再生するという形もある。禊ぎ・籠りの反復も同じ効用を持つ。武将の窟籠り伝承など多く語られるところである。また、「胎内潜り」という信仰行為はこの原理の簡略化である。こうした民俗思想は、蚕・蛇・熊などの生態に学ぶところがあつたはずである。

井上靖が自らの胎内籠りを繭と蛹を以って語ったことの意味は重い。

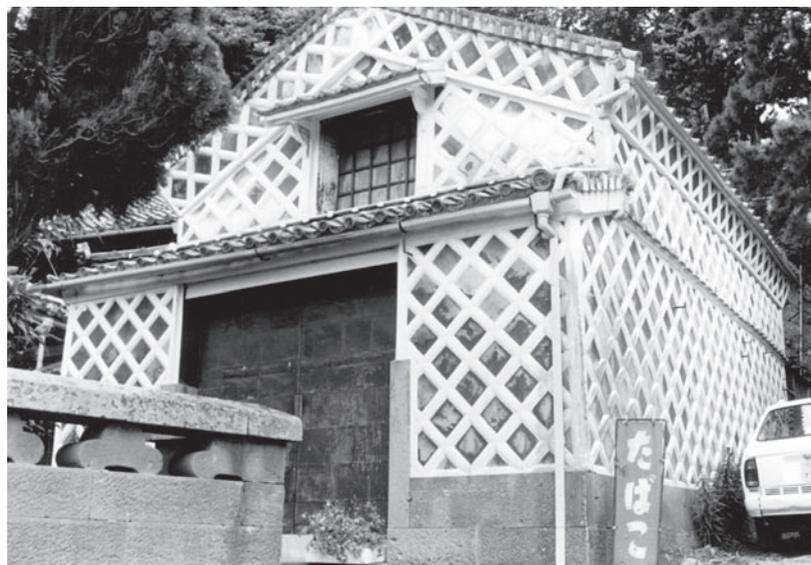
蔵籠り

作家が伊豆湯ヶ島で、三歳から十三歳まで、井上家に入籍されてはいたが血縁のない祖母か、とともに、土蔵で暮らしたことは知られるところである。『幼き日のこと』に次のように描かれている。

当然のこととして、土蔵の内部は暗かった。昼間でさえ薄暗いのであるから、夕闇の迫ってくる



写真① 蚕の繭（写真提供・櫻井弘人）



写真② ナマコ壁の土蔵（静岡県下田市）

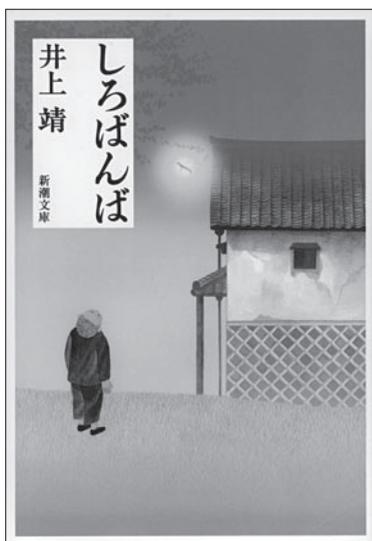
時刻になると、土で造った四角な箱の中はまっ暗だった。私は祖母がランプに点火するまで戸外で遊んでいた。そして窓に明りがさしてから、土蔵へは行って行った。

……家にはいるというよりは、頑丈な箱の中へは行って行く感じであった。

土蔵の源流の一つに寝殿造りの中に作られた「塗籠」があった。長野県には今でも母屋の一部に土蔵を組み込んでいる家がある。塗籠は、外来攻撃物からの遮閉・防火・貴重品の収納・秘事空間の確保などといった目的を持っていたものと思われる。土蔵は、その機能・目的を継承しているのである。土蔵とは四面を土や漆喰で塗り固めた倉庫で、防火や盗難防止を目的とするところから、窓は最小限で密閉性が強い。伊藤ていじは「都市の蔵」の中で次のように述べている。「駆けつけてきた出入りの左官が、その（土蔵の扉の）閉め合せて用心土を塗りこめる。用心土とは粘土をよく練り合わせた土で、通常は出入口や窓近くの甕のな

かにあらかじめ用意してある」（東京海上創業百周年記念出版『蔵』東京海上火災保険株式会社・一九七九年）
——。火災に際して土蔵の扉を味噌で塗り固めて火難を逃れたという話もよく耳にする。

密閉性の強い土蔵は神密の空間だった。作家は土蔵のことを「土で造った四角な箱」「頑丈な箱」と表現している。中国地方では年桶や種粃を納戸や蔵に祀る習慣があった。岡山県真庭市鉄山小字略の横山治郎（大正十二年生まれ）家では、正月の年桶を以下のように祀った。年桶は蔵の二階に糶俵三俵を並べ、その上



写真③ 新潮文庫版『しろばんば』表紙（装画・唐仁原教久）

に据えた。桶の中には米・重ね餅・小餅・コンブ・スルメなどを入れた。一月十五日におろし、重ね餅を家族で分けて食べた。糶俵の糶は種粃になすべきもので、その種粃は蔵の中に籠って靈力を増したことになる。井上靖の十年に及ぶ土蔵生活は、民俗的視点に立てば、繭籠り、熊の穴籠りと同質の蔵籠りであり、この間は、将来大きく飛翔する際の力を培養する期間だったことになる。子供が悪さをすると、懲罰として一定時間蔵に閉じこめるという方法は広く行われてきた。これを別な視点から見れば、内省・浄化しなければならぬ要素をためこんだ者が、土蔵に忌み籠りをしたことに、再生の力を賦与されて蔵から出て活躍するという読解もできるはずである。通常の生活ではあるにせよ、籠りの場としての属性を持つ土蔵で暮らし続けてきた意味は重い。

通常の住居と異なる土蔵での暮らしは、外界との接触が限定される。感覚による外界の感知は小さな窓に絞られていた。この限定は感性のアンテナを鋭敏に研ぎ澄ますことにつながった。「八月の盛夏の感覚は、

土蔵の二階で午睡から覚めた時の妙に物憂い不安な気持として遺つている。自分は眼を覚ました、祖母の方はまだ午睡を続けている。水車の音以外、何の物音も聞えない暑いだけの昼下がりの時刻である。「幼き日のこと」、夏は田圃の蛙の声、秋は虫の声に包まれる。「晩秋から初冬へかけて吹き渡って行く野分の夜のことは、多少記憶に残っている。夜半に眼ざめると、烈しい風の音が聞えている。あらしの夜の風のような荒れ狂い方ではなくて、何か烈しいものが、整然と通り抜けて行き、次第に遠ざかり、小さくなり、やがて消えてしまふ、そんな感じである。私はそうした風の音を、たくさんの生きものの集りのようなものとして受取っていた。「幼き日のこと」——水車の廻る音によって真夏の真昼の静寂が描かれ、波状的に吹き返してくる野分の風音を聴覚でとらえ、生きものの集団が移動してゆく音のごとくに把握する。土蔵の窓から入り来る音。幼い者の病の床、「流れの音、水車の廻っている音が耳にはいつて来る。朝と昼とをとり違えた鶏の刻をつける声も聞えてくる。外を歩いて

峡籠り

井上靖の自伝的作品群では、郷里の湯ヶ島が類似の表現でたびたび紹介されている。「少年」の冒頭には次のようにある。「私は小学校時代を郷里の伊豆の山の中の小さい村で過ごした。……現在では、私の郷里の村は、少しへんぴではあるが、伊豆の温泉部落として東京へも名前を知られているが、私の少年時代は、文字通りの天城山麓の山村で……」——。湯ヶ島はたしかに「山の中の小さい村」「天城山麓の山村」ではあるが、ムラの中を川ぞいに天城街道が通っている地形を見ると、「峡」「山峡」という印象もある。「甲斐」は「峡」の地名化したものである。「滝へ降りる道」では次のように描かれている。「当時は修善寺から日に何回かの馬車の便があるだけで、文字通り山間の寒村であった。温泉宿も小さいのが三軒あることはあったが、近郷近在の農家の老人たちが農休みに湯治に来るぐらいで、その他の時季は殆ど客というものはなかったようである」——。さらに厳正な考証の後でなければ仮言も許されないことは承知してはいるが、

いるおかのお婆さんの下駄の音、犬の泣き声、雀の声、そうしたものが、ほどほどの間隔を置いて耳にはいつて来る」「幼き日のこと」——聴覚に限ってみただけでも、土蔵の暮らしと作家の感性涵養とのかかわりの深さがわかる。閉塞的な土蔵の小さな窓は、幼少年期の作家を視覚によって広い世界へ導く刺激の窓口にもなっていた。「夏草冬濤」に以下のような回想的記述がある。「洪作は幼い時、この窓から、毎日のように下田街道を走る馬車を眺めたものであった。街道も、馬車も、玩具のように小さかったが、しかし、洪作はいつもその道が三島や沼津の都会地に続いており、またその馬車が、未知の他国の人を、都会地からこの山間の部落へ運んで来ると思うと、無心には眺めることはできなかつた」——こう見てみると土蔵は、感性を磨き、幼いながらも思念を深め、土蔵の窓から見える風物を起点として果てしなく広がってゆく大きな世界を想う場になっていたことに気づく。土蔵は飛翔・飛躍のための力を充足するための籠りの場であった。

特定の「山峡」の地が古くは「籠り」の地と考えられていたことがあつたのではないかと思われてならない。「甲斐」という地名は拡大化していったものではあろうが、これにかかる枕詞「なまよみの」は不思議なことばである。「自然の形に蘇る」という意味が仮説されてもよいのではなからうか。

古語の「峡」は「貝」「卵」「殻」などに通じていたのではあるまいか。「籠らせる空間」において共通性を持つのである。地形的に言えば、峡は窟に通じるころがあるのではなからうか。窟籠りと同様に、峡に籠ることによって力を蓄えたり、衰えた力をとりもどしてゆくのである。再生の場ともなり得るのである。温泉もまた、傷を癒し、疲れを癒し、病む心を癒す。温泉は人の汚濁を流し、人を再生復活させる。温泉発見伝説には、傷ついた生きものが湯につかっていると見て、人がその湯を温泉として利用するようになったというものが各地にある。鶴Ⅱ湯の鶴温泉（熊本県水俣市湯出）、鶴Ⅱ湯の湯Ⅱ温海温泉（山形県鶴岡市温海）ほか。鷲の湯・鹿の湯・鳩の湯などもある。

天城の山峡に湧く温泉にも「変若水」^{おちみず}的な、生命力を強める湯としての力はあった。

私は、井上靖が幼年期を過ごした湯ヶ島は巨視的に、そして古層の民俗信仰的に見た場合、一種の籠りの場としての役割を果たしていたと考えている。「私の自己形成史」の中に以下のような記述がある。

……現在では郷里の村も伊豆の温泉郷として多少は名がおっているが、私の少年時代は全く山中の一寒村であった。村から馬車で二時間揺られて、軽便鉄道の終点大仁部落^{おの}に出、さらに軽便鉄道に一時間乗って初めて、東海道線の三島町に出るというところであった。

馬車にはめつたに乘れなかった。一年に二、三回、それでも馬車で大仁へ行くことがあったが、私は軽便鉄道が通じているというだけのもので、大仁という小さい部落を尊敬した。大仁へ馬車がいいると、心が自然に緊張し、その部落の子供たちの誰もが活発で伶俐^{れいり}に思えた。道で彼等に出会

うと、何となく気が退けて俯向^{うつむ}くようにして歩いた。

大仁でもこんなだったから、三島町へ行くともっと大変だった。

靖は自分の育ったムラを「小さな山村」「寒村」などどくり返し記している。そして、外部との比較はここに引いた通りである。一見卑屈に見えるのだが、それは決して、そんな単純なものではなかった。これは外部世界への憧憬や空想、さらには探究へとつながり、思考や行動のバネになっていった。もとより靖は、寒村と表現した母なるムラを強い肯定感を以って描いている。「私は幼時を振り返ってみて、幼少時代を郷里の伊豆の山村で過したことをよかったと思う。温暖な伊豆のこととて、自然と闘ったり、自然の持つ荒々しいものに耐えて行くという生き方とは無縁であったが、自然の懐^{かこ}ろの中に全身で飛びこんで、優しく抱かれて生い育つことができたのは仕合せだったと思う」（「幼き日のこと」）。

作家の原郷をさぐってゆくと、これまで述べてきた通り、「繭籠り」（胎内籠り）「土蔵への籠り」「山峡籠り」とたどることができる。胎内籠りは誰にでもあるのだが、作家が己の原郷の原点を「繭籠り」を以って

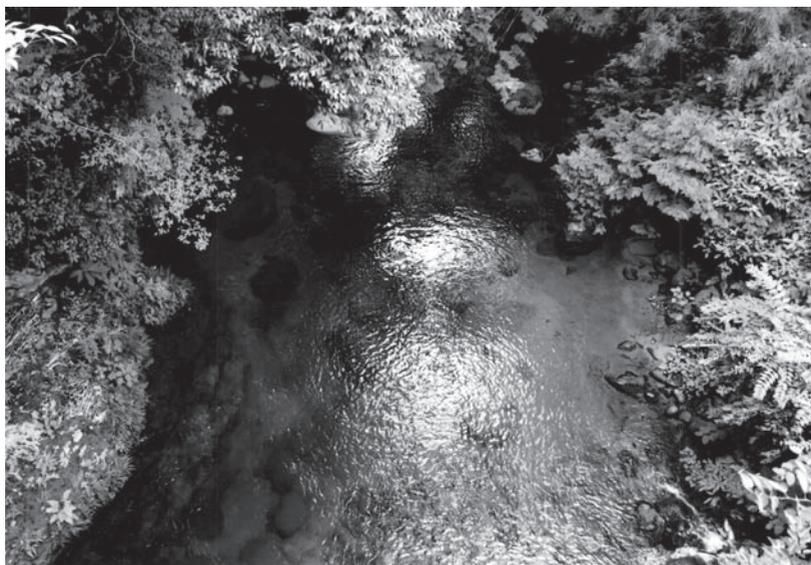
原感覚的に描いているところに注目しなければならぬ。「籠り」は「熟成」を促す。「籠りの重構造」こそが、作家を、将来広い世界へ飛翔させる発条力・エネルギー・人間性などを培う重要な柱の一つになっていたのではなからうか。多岐にわたるテーマに応じて、山なす作品群を創出してきた。作品の装置は時代を超え、空間を広げた。とりわけ、日本からアジア広域に及ぶ広い舞台において展開された高質な物語性のある多くの作品に、私は強く心を惹かれている。その原点が「籠りの力」にあることを思うとある種の興奮を覚える。

始原世界への感応

精霊への畏怖

井上靖は自然の中に息づく精霊や民俗的な神霊に深く感応するところがあった。それは以下の記述によってわかる。「本当の怖さというものは、お化けなどではなくて、滝とか、淵とか、そういった場所に一人で行った時感ずる、自分の他には誰も居ないといった思いであったようだ。自分の他には誰も居ないが、と言って、自分一人ではない。眼には見えないが、何か別のものが、そこには居るのである。滝の精霊であり、淵の精霊である」（「幼き日のこと」）——こうした記述がくり返され、「狩野川の主流には猫越淵^{ねここ}、大淵、宮ノ淵、おつけの淵、支流の長野川にはへい淵、巾着淵といった淵があった」と、淵の実名をあげて話を進めている。

「淵瀬常ならず」と言われる上に、狩野川台風などもあり、靖の少年時代のままの淵が残っているわけ



写真⑥ 持越川の淵



写真④ 落合楼下手の淵



写真⑤ 鈴ヶ淵 (吊橋の上から)

はないが、今でも、平素は澄明だが、「いけない時間」に近づくと引き込まれそうな恐怖感を漂わせる淵がある。本谷川と猫越川が合流して狩野川になるのだが、その落合の下手、落合楼の下方にある淵は深く、時に戦慄を誘う(写真④)。鈴ヶ淵(写真⑤)や、持越川が猫越川に合流する手前にある橋の下手の淵(写真⑥)も恐ろしげである。しかし、これらの淵にはヌシや精霊の伝説は伝えられていない。

引用文中に出ている「滝」や、「滝へ降りる道」に登場する滝は湯ヶ島の中心地から二キロほど天城峠に向かって進んだ山中にある「浄蓮の滝」(写真⑦)だと見てよい。滝の高さは二五メートル、幅七メートル、滝壺の深さは一五メートルにも及ぶという。滝に向かって右側の断崖には六方柱状節理が露出し、左側の下には洞穴が黒々と口をあけている。「滝は二、三年前、新聞社が選んだ日本百景という名勝地の一つに選ばれて、現在は春秋の季節には相当の観光客を招んでいるようであるが、当時は近郷の人しか知らない天城山中に匿された全くの無名の滝であった。滝壺の両側は切



写真⑦ 浄蓮の滝と滝壺

り削いだような絶壁をなして、絶壁の肌を雑木と羊歯類のような湿気を好む植物がふかぶかと生い繁り、夏でも鬼気を帯んだ冷気があたり一面に漂っていた」

神かくし
井上靖は、「神かくし」と呼ばれてきた「超常現象」的なものに深く心を寄せていた。まず、次の部分に注目したい。

〔滝へ降りる道〕。深々とした翠玉色の滝壺の底は見えない。滝の左側は窟をなし、それは瀑布の裏側に及んでいようにも見える。たそがれどきにたった一人でこの滝の前に佇んだとすれば、たしかに滝壺か、滝の窟に吸い込まれそうな恐怖を感じるにちがいない。じつは、流れ落ちる滝の裏側は、異郷・他界への入口になっているという伝承がある。『今昔物語集』には修行僧が瀑布を潜りぬけて異郷を訪問する話がある。

浄蓮の滝には「女郎蜘蛛伝説」がある。滝のヌシ伝説であり、既に「天城山隧道」(『しずおかトンネル物語』(しずおかの文化新書20・公益財団法人静岡文化財団・二〇一六年))で論じたことがある。ここでは、さらに別な素材から井上靖の精霊観や、超自然的なものや現象に対する原感覚にふれてみたい。

小学校へ行くようになってから知った話であるが、おくらは少女の頃神かくしに遇って行方不明になり、何日かして天城山中で発見された時は痴呆になっていたという。今の言い方で言うとおくらはノイローゼになり、突然蒸発し、何日か後に精神異常者として発見されたというわけである。私が小学校へ通っている頃、おくらはいつも私の家の敷地の東北の隅に造られてあった水車小屋のところに来て、洗濯したり、食器を洗ったりしていた。おくらは誰ともいっさい口はきかず、いかなる場合にも笑うことはなかった。……

奥田家に風呂を貰いに行くと、おくらはさんはいつも焚口の前に身を屈め、黙って風呂の火を焚い

ていた。……

「そうしたある時、私は風呂の中で、突如として大声を出して泣き出したことがあった。……」

幼い頃の心の反響板というものは、もしかすると大人のそれよりも鋭く、繊細ではないかと思う。私はおくらさんの存在が悲しかったから、そのために泣いたに違いなかったのである。

〔幼き日のこと〕

作家の感性の繊細さやおくらさんの内包するものの深い共感が滲み出ている。

『しろばんば』の中で、おくらさんは「おかねさん」として登場する。ある時、おかねさんが突然、蜂に刺された平一という少年の額を何回も吸うという場面が描かれている。おかねさんやおかねさんの人が持っている人間性の発露である。

『しろばんば』前編五章には、五年生の正吉が「神かくし」に遭ったこと、その探索・発見の過程が描かれている。洪作は幸夫とともに発見された正吉を見よ

精霊に深い畏怖感を感じ、洪作に仮託されてはいるが、山中で異様な眩暈感・幻覚を感じて「神かくし」に遭った者として扱われるなど二人の間には共通点がある。それは感受性の強さである。

井上靖は滝壺や淵に関する戦慄を伴うような恐怖、神かくしなどについて『幼き日のこと』の中で独自の理論を展開している。何か事件が起こる条件として、人が「いけない時刻」に「いけない空間」に臨むこと、その交錯を考え、主張している。次のように述べている。「幼い者にとっては、淵というものはいけない空間であり、午下がりとか暮色の迫る頃というのはいけない時刻であったかも知れない。そして幼い者だけが持つ原始感覚は、その空間と時刻の組合せが誘発しようとしているものを鋭敏に感じとっていたのではないか。——もちろん、これは私の勝手な想像である。柳田先生在世なら、伺ってみるところであるが、先生は小説家というものは勝手なことを考えるものですねと、笑っておっしゃるかも知れない」——柳田國男・井上靖の対談が実現しなかったのはまことに残念なことだ

うとして山に入る。洪作は嘔吐感や疲労感に襲われて杉林の中に踏み込んでしまう。「洪作は自分の意識が遠のくを感じた。夥しい数の杉の細い樹幹が天にでも届くような高さに見えたり、それらが互に入り混ってしまつて、何かわけのわからぬ形のものになってしまったたりした。洪作は眼を瞑っていた」——洪作は助け出され、「神かくし」に遭った者として扱われるのである。

井上靖と柳田國男

井上靖は柳田國男の『山の人生』という著作を強い関心を抱きながら読んでいた。柳田は『妖怪談義』や『遠野物語』『神樹篇』などでも「神隠し」にふれてはいるが、「神隠し」に本格的に取り組み、資料を集成しているのが『山の人生』である。同書で、柳田は、九章「神隠しに遭ひ易き氣質あるかと思ふこと」という項目を設定し、その中で、「私自身なども、隠され易い方の子供であつたかと考へる」と述べ、柳田自身の様々な体験を記している。井上靖もまた、滝や淵の

った。感性を重視するところから発した柳田國男は、井上説に対して大いに共感を示したにちがいない。

『遠野物語』八は次のように始まる。「黄昏に女や子供の家の外に出て居る者はよく神隠しにあふことは他の国々と同じ」。『遠野物語拾遺』一〇九「遠野町の某という若い女が、夫と夫婦喧嘩をして夕方門辺に出たあちこちを眺めていたがそのまま居なくなった。神隠しに遭つたのだと謂われていたが……」——「たそがれ」は「誰そ彼」、「かはたれ」は「彼は誰」、「ゆうまぐれ」は「夕目暗」の意だと思われる。この時間帯は視覚判断が乱れる時間で、よくない時刻の代表である。「丑三時」などもよくない時刻に入るだろう。よくない時刻は、要注意の時刻である。病人の容態が最も変化し易い時間は午前三時から四時の間だと聞いたことがある。「いけない時刻」と、それにかかわる伝承を集積してみなければならぬ。井上靖の刻限への関心は、負の側面のみに向いていたわけではない。肯定的な時刻として、例えば「暁闇」はあかつきやみをあげている。「いけない空間」「いけない場」は禁足地

として伝承されている場合もある。

井上靖が注目した滝壺や淵と精霊の関係を考える時は、樹木の霊についても考えなくてはならなくなる。

柳田國男は『神樹篇』の中で、樹齢を重ね、枝が極度に垂れた樹に昔の人は特段に注意したとして、早川孝太郎の、加賀小松地方の山樵は必ずそうした老樹を伐り残し、「生長するに従って益々之を畏敬した。樞其他の雑木にもあつたが、最も多くは松」であつたという報告をふまえて、「之を神様松と称して敢て侵さぬのみか、神隠し其他の不思議な出来事は、大抵は此木を中心として、発現する」と述べている。ここに登場する異形の老樹は禁伐樹であり、その樹木の生えている一面は伝承上の禁足地であつた。それは、時に「よくない空間」になるのである。

山に入る人びとは異形の樹木・畸形樹に注目し、こうした樹木の精霊をとりわけ強いものとして禁伐伝承を以って守った。東京都青梅市御嶽神社の裏山に、湾曲した太い枝を腕のように張り上げている杉の老樹がある。この木は「天狗の腰掛杉」と呼ばれている。』

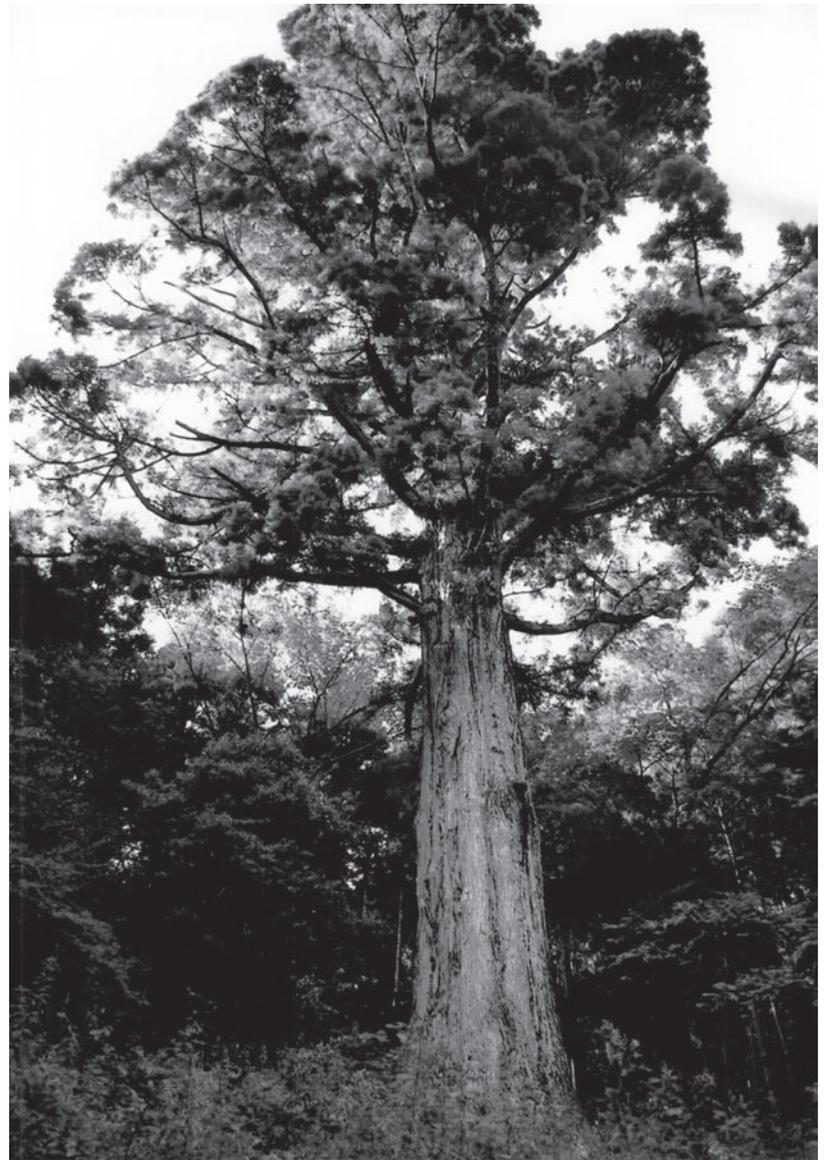


写真⑧ プナの畸形樹（天城山中にて）

るばんば』の「洪作の神かくし」の終末部に伯父である石守森之進が、見舞客の一人に、「こんなひ弱じや、将来困りもんじゃない。天狗だって喰つてもうまくないと思えば見棄てますよ」と語る部分がある。このことばの中には暗に神隠しと天狗のかかわりが語られているのであるが、天城山麓のみならず、神隠しは天狗によって起こされるとする伝承は各地に広く見られた。その天狗の拠り所の一つが畸形の老杉のごときものであつた。禁伐樹としては次のような例がある。㊦窓木 ㊧枝と幹とが密着して円形の空間を作っている木で、山の神の木だと伝える（岐阜県飛騨市河合町角川）、㊨三又木 ㊩山のお休み木だから伐つてはいけないと伝える（山形県西置賜郡飯豊町高峰）、㊪東鎌枝西梢 ㊫東側の枝が鎌のように曲つて、西側に出た枝が梢のように伸びている木（静岡県榛原郡川根本町大間）、㊬日通し ㊭双幹型の木や鎌枝の間から朝日を見ることが出来る木（同）、㊮箒木 ㊯幹の生長が途中で止まり、そこから枝が簇生している木（同）などがある。

㊰㊱は明確に山の神にかかわる木だとしており、他のものも禁伐樹とされている。直上の育たない木は実用性がないから伐られないのだという見方もできるであろうが、畸形ゆえの稀少性、神聖感に対する畏怖の眼ざしは否定できない。写真⑧は、八丁池を旨とする途中、天城山中で見かけたブナの巨樹であり、畸形樹である。根のすぐ上から四方に張り出す太い腕状をなす枝、この威圧感・存在感はどうだ。こうした老樹は樹精に満ちた森のヌシである。こうした巨樹は、樹林を継続させるための「種木」、種を撒き散らす命の木となつて森を守ってきたのである。

作家井上靖を育んだ天城山にはこのような木がたくさんある。県の天然記念物に指定された太郎杉（樹高四八メートル、根周り一三・六メートル、目通り幹周り九・六メートル、推定樹齢四〇〇年、写真⑨）や、徒時代の天城峠（標高八八〇メートル）、即ち二本杉峠の名称のもとになった二本杉などにも注目しなければならぬ。峠は時として「いけない空間」となる。「いけない空間」として民俗的に知られているものの一つに「クセ地」「祟り地」「罰山」「フヂ」などと呼ばれる場



写真⑨ 傘型に聳える太郎杉

所があるが、ここでは言及しない。

『しろばんば』を読み進めると、「神かくし」にかかわる村落共同体の対応民俗があったことがわかる。探索に対する炊き出し、さらには「神かくしが見付かったことに対するお礼の祈禱」（これは発見地点で行う）、帰還時の見舞、などが行われていたことがわかる。柳田は、時に「神隠し」のことを「迷子」とも称しているのだが、探索に際しては鉦・太鼓を叩く地があったこと、関東では「まい子のく何松やい」などとなり返し、上方辺では「かやせ、もどせ」と、ややゆるりとした悲しい声で唱えてあるいた、と述べている。

人は長い間の歩みの中で始原の要素を剥ぎ落とし、消去することに意を注いできた。山野を拓き、人の領域を徹底的に拡大した。その結果、自然の持つ暗がりはなくなり、闇夜までも白昼化しつつある。そして、自然の根源に対する畏敬や畏怖の念を喪失し、無機質、効率絶対化、無感動の世界に突き進みつつある。井上靖は、その原郷において、『日本書紀』に書かれている「磐根、木株、草葉も、猶能く言語ふ」という始

原の世界に感応してきた。その体験の数々が、作家のみずみずしさや、やさしさ、善なるものへの共感、骨格のある生き方を培う重要な要素になっていたのである。



丸山薫と山形

義父・靖、そして恩師との不思議な縁

井上弓子（井上靖次男の妻）

私は、平成八年に、夫・卓也が背中を押してくれたこともあり、当時実家の母が経営していた山形市にある会社の後継者として山形に戻り、今もなお逆単身赴任を続けています。

山形県と義父・井上靖との縁は数えるほどなのですが、その中で私自身の人生とも不思議なつながりをもつ、丸山薫とご縁について紹介したいと思います。

山形県は人の横顔のような形をしています。そのほぼ中央、出羽三山のひとつに数えられる名峰・月山の山麓、山形県西村山郡西川町大字岩根沢に「丸山薫記念館」があります。平成元年十二月に完成し、翌年四月に開館しました。

丸山薫は、四季派を代表する抒情詩の詩人であり、

第三高等学校（現・京都大学）に在学中から桑原武夫、三好達治、梶根基次郎らと親交を持っていました。元々は船乗りを志望していたため、船や海に関する詩には独自の世界があると評価されています。昭和二十年の終戦直前から二十四年まで、ここ岩根沢に疎開し小学校の代用教員をしていました。

義父が昭和五十一年に刊行された『丸山薫全集』の編集に携わったことから、丸山薫記念館設立発起人の方々の間で、是非記念館の館銘板の揮毫を義父にお願しようということになったそうです。

『丸山薫全集』の編集には、桑原武夫・井上靖・吉村正一郎・竹中郁・八木憲爾が携わり、靖は第二巻に解説を寄せています。この第二巻には、詩集「青い黒

板」が収められており、この「青い黒板」所収の詩の

多くは岩根沢に疎開中に作られています。あとがきに書かれています。この詩集は小学校五六年生にあてて作られており、「詩はどんなにたのしく、つくる人と読む人のこころをなぐさめて元

気づけるものかということ、よくふかくわかってもらいたいです」と子どもたちに呼びかけています。

揮毫の依頼があった当時、熱心な発起人のおひとり、いかにも文学少女であっただろうと推察される着物姿の渡辺花子さんが、西川町からはるばる世田谷の家を訪問され、西川町からりんごや漬物など季節の産物が届いたことを覚えて

います。館銘板は、天童市の将棋駒の名工に依頼して、櫨の一枚板に彫つ

てもらったと聞きました。

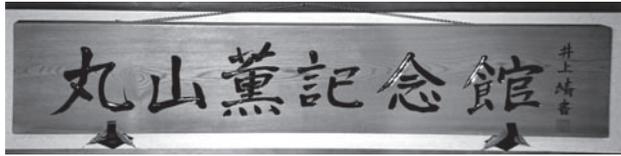
展示室の入口に今も立派に掲げられています。

義父は亡くなる前年、平成二年七月二十日に、岩手県北上市の詩歌文学館落成式に出席した後に、足を延ばして丸山薫記念館を訪ねています。記念館に展示されている当時の写真を見ると、最晩年の顔をしていて、さぞかし道中は疲れたことでしょう。山形市に住む私たちでも「岩根沢」と聞くと、「あの雪の深い……」と言うほどの山奥なのですから。

丸山薫が岩根沢に移住した前年、山形大学教育学部付属小学校での私の恩師・大谷正実先生が、教員としての初任地である岩根沢小学校に赴任なさいました。

私が山形に戻って久しぶりに先生にお会いした時に、大谷先生と丸山薫の出会い、そして義父と丸山薫記念館のご縁を教えてくださいました。

大谷先生は、理科を専攻した朴訥とした方で、亡くなるまで教え子に慕われていました。先生のお蔭でも幸せな幼少期を過ごすことができました。教え子たちは感謝しています。その大谷先生に大きな影響を与



井上靖揮毫の館銘板



左より丸山三四子（丸山薫夫人）、大谷正実、丸山薫、ひとりおいて渡辺花子

えたのが丸山薫でした。

大谷先生の著書（大谷正実『続凡果抄』私家版、平成二十三年）によれば、四月になり着任した丸山薫は、年齢は四十六歳、体つきは堂々たる偉丈夫、「モツサリとした無口な人」で、自分から先に話しかけてくるということはまずなく、何か戸惑っているような時に口添えしてあげたりすると、いんぎんに謝意を表す人だったそうです。ここには根本的な「ことば」の問題があったようで、担任している子ども達が丸山先生に話しかけても全然通じず、職員との間でも程度の差こそあれ、同じような状況だったようです。

ただここで面白かったこととして、次のようなエピソードが書かれています。

あの無口で、用があることさえあまり口を開かない丸山先生が時々、職員の誰もいない小使室で、囲炉裏を囲み当時七十歳という学校の小使い婆さんと、何か語り合い共に大声をあげて、笑いこけていたことである。

小学校にも入学できないという境遇で育った彼女は、字ひとつ読み書きできなかった。共通語を全然意識しない、純粋な山村の方言、それで語り合うことによって、先生は東北山村の何かを探っていたのかも知れない。畳敷きの囲炉裏ばた。とにかく二人にとって楽しそうなときだったようだ。

こうして、しばらくすると、どんなことにでも、親身になり真摯に応答してくれる人柄に魅了され、親し



岩根沢時代の丸山薫

く交流するようになったようです。また、学校から歩いて四く五分、農家の旧蚕室を寓居としていた丸山宅では、大谷先生らが訪ねると、奥さま共々いつも歓待してくれ、この部屋が月山の山懐とは思われない文化塾となったと書かれています。

振り返ってみると、昭和二十年前半、日本中の大都市が空襲による爆撃で焼土と化し、食糧事情も最悪、食うや食わずになっていたとき、よくもあのよ

うな別世界の生活ができたものだと思う。しかし、私にとっては人間としての成長過程において、到底筆舌には尽し難い収穫があったのだ。

丸山薫と共に過ごした月日は、大谷先生にとって生涯忘れられないできない特別な時間として、大切に思い出の中にしまわれていたようです。

先生は平成二十六年一月に八十九歳で亡くなられましたが、その前年、同級生と先生の米寿のお祝いをした時に、先生から私たちに配られた封筒がありました。



大谷先生と教え子たち。丸山薫記念館にて、靖の直筆の書と訪問時の写真をバックに
(前列左端が筆者、後列左から3人目が大谷先生)

それぞれの名前がひらがなで書かれた封筒を開くと、六十年前の小学一年生の時に書いた作文や詩そして絵が入っていたのです。みんな驚くばかり。親も自分でさえも保管していない小学一年生の時の作品との対面は、嬉しさより、先生が六十年もの間大切に保管して下されたことへの感謝でいっぱいでした。

大谷先生の私たちへのこのようなまなざしの源にあったものは、教員になられて最初に赴任された岩根沢の小学校での、丸山先生との出会いなのだと確信しています。

そして大谷先生の教え子の私が井上家に嫁いだこと、義父が『丸山薫全集』の編者を務め、記念館の館銘板に揮毫し、最晩年には館のある岩根沢を訪ねたことは、何か全てが準備されていたことのようにも思えるのです。

◎井上靖文学館(長泉町)

【企画展】

○「教科書で読んだ井上靖」展

教科書で読んだあの作品、おぼえていますか？一九六〇年から現在まで五〇作品以上が掲載され、多くの人が教科書を通じて井上靖の作品と出会いました。本展では、教科書掲載作品のことはを紹介するとともに、井上靖が子どもだった頃、「しろばんば時代」の資料を展示します。

【文学館講座】

○「井上靖の浜松時代とゆかりの作品」
二月四日(日) 一三時三〇分～一四時三〇分
講師・和久田雅之(静岡理工科大学講師)

【生涯二一〇年記念書籍】

井上靖の教科書掲載作品から二二篇を選定し、一冊の本を作りました。一〇〇〇部限定、購入希望の方は井上靖文学館までご連絡ください。

『教科書で読んだ井上靖』(編集・発行：井上靖文学館)
内容

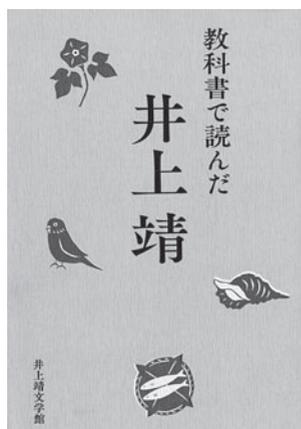
○教科書に掲載された井上作品(小学校から高校まで、詩、小説、随筆)

○掲載教科書一覧表

○解説「井上靖と国語教科書」勝呂奏(桜美林大学教授)

問い合わせ：井上靖文学館

静岡県長泉町東野クレマチスの丘五一五―五七
☎〇五五―九八六―一七七―



四六判並製・192頁
本体1000円
2017年9月刊行

事業報告

理事長 井上修一

平成二十八年六月二十日に本財団と旭川市が「井上靖記念事業の実施に関する協定」を結び、井上靖の遺志を継いでわが国ならびに地域の文化振興に寄与する井上靖記念事業の全体を協力して運営することになりました。今年度はまた文学・美術・歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」も、旭川市の井上靖記念事業実行委員会の協力を得て「井上靖記念文化賞」として装いを新たに再開することが出来ました。喜ばしい限りです。

(一) 井上靖を記念する文化賞

第一回「井上靖記念文化賞」は、平成二十八年十一月十日から平成二十九年一月十三日にかけて、報道機

関等に候補者の推薦をお願いし、平成二十九年三月四日に開催した選考委員会において、六花亭製菓株式会社社長の小田豊氏おだゆたかと世田谷文学館館長の菅野昭正氏かんのあきまさの二氏を受賞者に決定しました。賞の贈呈式は、平成二十九年五月二十日に旭川グランドホテルにおいて行われました。賞の選考が二十八年年度、贈呈が二十九年年度と年度をまたいでいますが、旭川市の冬の気候を考慮した結果です。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

○オーストラリア

「井上靖（奨励金）賞」はオーストラリア・ニュージーランドにおける日本文学の研究奨励のために、平

成十八年にシドニー大学に設立したものです。選考はシドニー大学の井上靖（奨励金）賞選考委員会にお願いであります。今年度はその第十回となりますが、東日本大震災後に書かれた日本や海外の文学作品を調べ、日本に対するイメージが大震災前後でどう変化したかを分析してまとめたシドニー大学講師の時田珠妃氏に差し上げることになりました。

平成二十八年十月七日、シドニー大学・本財団・旭川市共催、豪日協会・シドニー日本人会等の協力で、シドニー大学のオウデイトリウム・チャールズ・パークインズ・センターにて贈呈式が行われました。

またこの会場で、本財団の依頼により井上靖賞の創設と約十年にわたる授与式の企画等に尽力され、オーストラリア・ニュージーランドにおける日本



時田珠妃氏

文学研究の普及に貢献された大谷正矩氏が、総領事表彰を授与されました。

○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、本財団と国際交流基金ベトナム日本文化交流センターとが共同で設立したベトナム日本文学研究論文コンテスト「井上靖賞」は、今年度が第二回となり、十二名の応募者の中、優秀な論文三点を選出しました。審査委員はファン・ニヤット・チュウ（ホーチミン市人文社会科学大学言語学部非常勤講師）、ファム・スアン・グエン（ハノイ文学協会会長）、ファン・ハイ・リン（ハノイ人文社会科学大学日本研究学科准教授）の三氏です。平成二十九年三月二十四日にハノイのメリアホテル会議場にて授賞式を行いました。

第一位 グエン・ナム「国境を越える倫理——二十世紀初頭の東アジアにおける『中学倫理書』の翻訳と翻案」

第二位 ファン・トゥウ・ヴァン「井上靖の西域小説における歴史と人間」

第三位 グエン・ヒュー・タン「精神分析の観点からの太宰治『人間失格』」



日本文学研究論文コンテスト「井上靖賞」の受賞者と関係者

なお井上靖作品のベトナム語翻訳出版助成に関しても、平成二十八年度は該当がありませんでした。

また、井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ作成の助成もいたしました。

三回企画展「井上靖と西域紀行Ⅱ——敦煌へ行けぬ聖地ゆえの情熱」。十月二十二日、ギャラリートーク、講師・佐藤純子氏（日中文化交流協会理事）「井上靖と西域を旅してⅡ」。

平成二十九年一月二十一日～四月九日、第四回企画展「詩人 東延江展」（旭川文学資料友の会との共催展示）。三月二十五日、講演会、東延江氏「私の詩 私の絵」。

○旭川文学資料館

平成二十八年三月八日～五月二十八日、企画展「芥川賞受賞から『氷壁』の頃」（旭川文学資料館・NPO 法人旭川文学資料友の会主催、井上靖記念館・当財団共催）。

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○井上靖文学館（長泉町）

常設展示の他に以下の三つの企画展を本財団の後援

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開
○当財団ホームページ
更新と管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

平成二十八年四月一日、旭川市井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年）を更新。
平成二十八年七月十五日、『旭川市井上靖記念館報』第十六号の発行に協賛。

常設展示とともに、左記のような企画展四回を本財団と共催で開催し、「井上靖講座」も併催しました。

平成二十八年四月十六日～七月十日、第一回企画展「井上靖『流砂』の背景——舟越保武の挿画原画」。五月二十一日、「井上靖講座」講師・館職員による見どころの解説。

平成二十八年七月十六日～十月十日、第二回企画展「井上靖 人と文学Ⅶ 『天平の薨 執筆の頃』。八月六日、『天平の薨』映画上映会。

平成二十八年十月十五日～二十九年一月十五日、第

で開催しました。

平成二十八年三月三十一日～八月三十日、「しろばんば時代の伊豆湯ヶ島——川端康成・梶井基次郎・井上靖」展。

平成二十八年九月一日～二十九年三月十四日、「真田軍記」展。

平成二十九年三月十六日～九月十九日、「五感であそぶ井上靖の世界」展。

○アジア博物館・井上靖記念館（米子市）

平成二十八年九月三十日、友の会会報『海鳴り』第四十号の発行に協力。

(四) 近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学の資料収集に協力しました。

井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機関誌『伝書鳩』第十七号を平成二十八年十二月に発行しました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

○平成二十八年九月二十五日

長泉町の井上靖文学館において講演「父 井上靖と私」が行われました(講師・本財団理事の浦城幾世氏)。

○平成二十八年十月七日

シドニー大学のオウデイトリウム・チャールズ・パーキンズ・センターで行われた「井上靖(奨学金)賞」贈呈式で受賞者の講演の後に、文化プログラム「井上靖の世界と旅」が行われ、井上靖の活躍した日本と彼が旅したシルクロード等の世界を美しい画像と音楽と詩の朗読で紹介しました。

○平成二十八年七月三十日

井上靖研究会の夏季研究会が伊豆市教育委員会後援で伊豆市天城湯ヶ島支所で行われ、本財団からも参加いたしました。蘇洋氏(関西大学大学院文学研究科博士課程後期在学)の研究発表「井上靖『楊貴妃伝』における安史の乱」、瀬戸口宣司氏(詩人、前國学院大學講

師)の講演「井上靖と詩」。

○平成二十八年十二月四日

井上靖研究会の冬季研究会が國學院大學院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。劉東波氏(新潟大学大学院博士課程後期在学)の研究発表「井上靖『異域の人』論——班超の一生をめぐって」、宮崎潤一氏(公立中学校教諭・『焰』同人)の研究発表「『北の海』前後考」、佐藤純子氏(日中文化交流協会理事)の特別講演「井上靖先生との思い出」(聞き手・井上修一)。

○平成二十八年十二月十八日

旭川市立井上靖記念館・旭川市教育委員会・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、本財団後援で、全国の中・高校生を対象にした第五回「青年エッセーコンクール」の表彰式が、旭川グランドホテルにて行われました。募集テーマは「先生」です。審査員長は吉増剛造氏(詩人)、審査員は平原一良(北

海道文学館副理事長)、鳥居和比徒(北海道新聞文化部長)の両氏です。

最優秀賞

中学の部 小笠原崇文「先生の手、僕の手」(筑波大

学附属中学校二年)

高校の部 池田さやか「白いマスク」(北海道おといね

つぶ美術工芸高等学校三年)

表彰式の後に、コンクール審査員長である吉増剛造氏による記念講演「柳田國男ノート」が行われました。

○平成二十九年一月二十九日

「あすなる忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館(長泉町)・劇団しろばんば・伊豆市・静岡新聞社・静岡放送・本財団などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島熊野山墓地での墓参会、天城会館劇場ホールで井上靖作品読書感想文・感想画コンクール優秀作品の発表ならびに表彰式が行われました。

読書感想文最優秀賞

小学生の部 町井孝輔「『しろばんば』を読んで」(修

善寺南小学校六年)

中学生の部 井上美穂「北の海に向かって」(筑波大

学附属中学校三年)

感想画最優秀賞

小学生の部 丹藤優「しろばんばをつかまえろ」

(伊豆の国市立大仁小学校五年)

感想画優秀賞

中学生の部 菊池智貴「隧道だ」(天城中学校三年)

また午後には同ホールで井上靖原作「千利休 本覚坊遺文」の映画上映会が行われました。

(六) 特定寄附事業

平成二十八年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

(七) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上

靖に関係する次のような催しがありました。

○軽井沢高原文庫

平成二十八年七月二十三日～十月十日、夏季特別展
「130年の軽井沢——室生犀星・堀辰雄・川端康成・遠藤周作：」。井上靖『憂愁平野』（昭和三十八年一月、新潮社刊。冒頭部で軽井沢が描かれる。生沢朗・挿画）の展示。

○秋山庄太郎写真芸術館

平成二十八年四月二十九日～五月二十九日、特別展
「『書』——写真家秋山庄太郎+書家沢村澄子」。秋山庄太郎撮影による井上靖のポートレートと井上靖揮毫の色紙の展示。

○井上靖記念館（旭川市）

平成二十八年七月二十三日、文学講演会、講師・藤澤全氏（元日本大学教授）「『獵銃』～世界文学的名作～主題を叙情にくるんで、人生の裂け目に照準」。

壁』を紹介。十一月十三日、関連講演会、講師・浦城幾世氏「『氷壁』の思い出」。

平成二十九年一月七日～三月二十日、企画展「作家と石川近代文学館——文学館を支えた人たち」。

○福井県ふるさと文学館

平成二十八年十月十五日～十二月十八日、「中野重治展 ふる里への思い、そして闘い」、第二回中国訪問日本文学代表団の写真（井上靖達と北京飯店前で撮影）展示。

○NHK放送研修センター・日本語センター

平成二十八年十一月二十日、講演会、NHK放送技術研究所講堂にて、講師・井上修一「利休の死」。

○NPO法人旭川文学資料友の会

平成二十八年十二月二十日、会報『友の会通信』第十八号発行。

平成二十八年九月二十四日、文学講座、講師・石本裕之氏（旭川工業高等専門学校教授）「井上靖の最後の短篇集『石濤』から二編——井上文学、老境の対話」。

平成二十八年十一月十九日、文学講座、講師・藤尾均氏（旭川医科大学副学長）「『天平の薨』留学僧のうち、あなたは誰が好きですか？」。

平成二十九年一月二十八日、文学講座、講師・片山晴夫氏（北海道教育大学名誉教授）「井上靖と東京オリピック」。

○井上靖ナカマドの会（旭川市井上靖記念館内）

平成二十八年八月一日、『赤い実の洋燈』四十八号発行。

平成二十九年二月二十日、『赤い実の洋燈』四十九号発行。

○石川近代文学館

平成二十八年九月十七日～十一月二十七日、秋の企画展「作家と山山 日本文学百名山」で井上靖の『氷

○「伊豆文学まつり」（伊豆文学フェスティバル連携イベント）
平成二十九年一月二十九日～三月五日、伊豆市主催。

井上靖作品読書感想文・感想画コンクール入選作品展示・伊豆文学散歩・伊豆市ゆかりの文学作品朗読会・伊豆市ゆかりの文学作品特別展示・創作ミュージカル上演等。

○「伊豆文学フェスティバル」

平成二十九年三月五日、伊豆市民文化ホール（修善寺生きいきプラザ内）にて、伊豆文学フェスティバル実行委員会・静岡県・静岡県教育委員会主催。第二十回伊豆文学賞表彰式と伊豆文学塾（審査員による講演会・座談会）。

（八）役員

平成二十八年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長 井上修一
常務理事 浦城幾世
理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 小池語朗
佐藤純子
監事 高橋いづみ
評議員 井上卓也 相賀昌宏 表 憲章 小西千尋
篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建
(五十音順)

二十八年年度に遠い旭川より理事と監事をお引き受け
くださいました小池語朗、高橋いづみ両氏をご都合に
よりお引きになりました。ご指導ご鞭撻をいただき、
誠にありがとうございました。

なお平成二十九年度の理事・監事・評議員は次の
方々です。ご支援のほど、よろしくお願い申しあげま
す。

理事長 井上修一
常務理事 浦城幾世

理事 赤岡昌弘 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋
佐藤純子
監事 樽井里美
評議員 井上卓也 相賀昌宏 表 憲章 小西千尋
篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建
(五十音順)

また事業を協力して実施するために平成二十八年六
月三十日に旭川市が設置していただきました「井上靖
記念事業実行委員会」の委員は次の方々です。

委員長 小池語朗(旭川市教育委員会教育長)
副委員長

菅野 浩(NPO法人旭川文学資料友の会会長)
池田哲哉(北海道新聞旭川支社長)

委員 高橋いづみ(旭川市教育委員会社会教育部長)
荒川美智(NPO法人旭川文学資料友の会理事・旭川

市井上靖記念館長)

監事

東 延江(NPO法人旭川文学資料友の会理事・旭川
文学資料館長)

吉田哲也(北海道新聞旭川支社事業担当部次長)

なお平成二十八年十二月十三日に人事異動により委
員長の小池語朗氏が赤岡昌弘氏(旭川市教育委員会教
育長)に、平成二十九年四月二十六日、委員の高橋い
づみ氏が大鷹明(旭川市教育委員会教育部長)、樽井里
美(旭川市教育委員会社会教育部長)両氏に、平
成二十九年六月二十八日には副委員長の池田哲哉氏が
小林亨氏(北海道新聞旭川支社長)に変更になりました。
退任なされた方々にはご指導ご鞭撻をいただきました。
とうございました。

平成二十九年度の「井上靖記念実行委員会」の委員
は次の方々です。ご支援・ご指導のほどよろしく願
いいたします。

委員長 赤岡昌弘
副委員長 菅野 浩 小林 亨
委員 大鷹 明 荒川美智 樽井里美
監事 東 延江 吉田哲也

(九) 住所・連絡先

一般財団法人 井上靖記念文化財団
〒一五六―〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・FAX: 〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会 事務局
〒〇七〇―〇〇三六
旭川市六条通八丁目 セントラル旭川ビル七階
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電話: 〇一六六―二五―七五五八
FAX: 〇一六六―二五―八二一〇

図書だより



二〇一六年四月以降に刊行、発表された井上靖に関係する書籍、論文、記事等をご紹介します。

【書籍】

○浦城いくよ『父 井上靖と私』（ユーフォーブックス、二〇一六年五月）

○藤澤全『井上靖「獵銃」の世界——詩と物語の融合 絵巻』（大空社出版、二〇一七年四月）

【論文・記事】

○趙秀娟「井上靖『孔子』の中国における受容について(1)」(『アジア・文化・歴史』一号、二〇一六年四月)

○蘇洋「井上靖「楊貴妃伝」論——典拠と宦官・高力士の役割」(『国文学』一〇一号、関西大学国文学会、二〇一七年三月)

○高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第25報) 井上靖・古井由吉」(『聖マリアンナ医学研究誌』一七巻一号、二〇一七年三月)

○半田美永「井上靖『孔子』の旅」(『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』和泉書院、二〇一七年三月)

○劉淙淙「井上靖研究——西域小説から「孔子」へ」(博士論文、二〇一七年三月)

○劉東波「井上靖「玉碗記」論——対の器物から生まれた人物」(『新大國語』三九号、二〇一七年三月)

○劉東波「井上靖「西域物」における異域の人々——「敦煌」の登場人物をめぐる」(『環東アジア研究』一〇号、二〇一七年三月)

○魏大海「井上靖の『蒼き狼』から読む「狼の原理」」(『日文研』五九号、二〇一七年五月)

○礪波護「佐伯富先生と井上靖『通夜の客』」(『敦煌から奈良・京都へ』法藏館、二〇一六年一〇月)

○綾目広治「井上靖『孔子』論」(『柔軟と屹立——日本近代文学と弱者・母性・労働』御茶の水書房、二〇一六年二月)

○劉東波「井上靖「漆胡樽」論——「西域物」の源泉」(『現代社会文化研究』六三号、二〇一六年二月)

○高木伸幸「井上靖「赤い実」(「しろばんば」後編) 授業試案——中学生の共感を高めるために」(『国語国文研究と教育』五五号、二〇一七年二月)

○勝呂奏「若き井上靖考——詩的「自己」の獲得」(『桜美林論考 人文研究』八号、二〇一七年三月)

◎『井上靖研究』第一六号 目次紹介

論文

高木伸幸「井上靖「四角な船」考——時事的装飾と人物造形」

勝倉壽一「井上靖「玉碗記」論」
小田島本有「自己本位型人間から献身型人間へ——『天平の薨』における普照の変貌をめぐる」

劉東波「井上靖「異域の人」論——班超の生きる意味」
蘇洋「井上靖「楊貴妃伝」論——史料との比較から見る楊貴妃像」

山田哲久「井上靖「洪水」の典拠と方法」
李哲権「壺の力学・壺の生を生きる詩人(下)——井上靖の想像力への夢想」

小関一彰「死との対話、生の輝き——「化石」論(二)」
宮崎潤一「北の海」考——修道院化原因とその後」

その他

佐藤健一「曾根博義先生のこと」
浦城いくよ「追悼 曾根博義先生——シドニーへ」(一緒して)
佐藤純子「井上靖先生との思い出」(インタビュー)

編集後記

『伝書鳩』十八号をお送りします。

六花亭は、しつとりとしたマルセイバターサンドが大好きです。味はもちろん、蔦の紋様のパッケージも秀逸です。お花が描かれた缶などどれをとっても可愛らしく、お菓子をいただいた後も、趣味の手芸用品を入れて長く傍に置いていきます。

菅野昭正先生は、いつも穏やかに微笑んでいらつしやるその柔らかな佇まいが、私の子供のころから変わりません。

新生、井上靖記念文化賞を、素晴らしいお二方が受賞してくださいました。

これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

西村承子

伝書鳩 第18号

発行 二〇一七年十二月二十日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九 井上方

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団